

新作能「皇軍艦」の諸問題

はじめに

太平洋戦争中、昭和一八年に新作能として発表された「皇軍艦」^{みいくさぶね}は、海軍の勇姿を讃え、国民を鼓舞する作品として、当時世間で評価を得た。しかし、戦後に発行された古典文庫第五七一冊『未刊謡曲集（続十四）』（平成六年六月二〇日）の田中允による解題に「第二次世界大戦の聖戦化を謡曲で表現しようとした際物謡曲で、敗戦後の現在では到底受容できない作品である。」と評されている通り、戦後の再演もなく現在に至っている。

新作能^{注2}とは、広義には明治維新以後に、素人や玄人、公的、私的を問わず作詞された謡曲のことを示し、節を付けていないものや、実際に演能されていないものも含まれる。他の芸術分野との折衷演出を除いても、平成二八年現在で三三〇作品以上が存在している。その中で、第二次世界大戦当時（一九三九年九月一日～一九四五年

九月二日）に創作された謡曲は、成立年代が明確ではないものも含み、約四〇作品が確認できる。

この時期に限定して二曲以上作詞した人物を左に挙げる。

- | | |
|-------------|--|
| 土岐善麿（国学者） | 六曲 |
| 竹中 実（能楽愛好者） | 六曲 |
| 高浜虚子（俳人） | 五曲 |
| 小林静雄（能楽研究者） | 四曲 |
| 竹腰健造（建築家） | 三曲 |
| 奥島愚潭（※詳細不明） | 二曲（※奥山愚潭も奥島愚潭と同一人物と考えられ、『美禪』という書籍も出版か） |

この六名以外の作詞者は、一回限りの雑誌投稿や、節のない個人的な作詞活動にとどまっている（実際に上演された「忠霊」を手掛けた観世流シテ方能楽師の浅見真健は例外）。

また、戦時中に作詞された約四〇曲中、能楽師による公開性のあ

東谷 櫻子

る催しで、同時代に上演されたのは次の一〇作品である（一）内は節を付けた者）。

土岐善麿 「和氣清麻呂」「喜多実」、「頭如」「喜多実」、

「夢殿」「喜多実」、「青衣女人」「喜多実」

高浜虚子 「時宗」「一世桜間金太郎」、「義経」「六世観世鍔之丞」、

「奥の細道」「一世桜間金太郎」

竹腰健造 「世阿弥」「一世金剛巖」

浅見真健 「忠霊」「浅見真健」

佐古少尉 「皇軍艦」「六世観世鍔之丞」

これらから、新作能が実際に公演に至るには、「著名な人物の作詞」「節を付けることができる専門家」「実際に演じる能楽師」の三点の揃うことが、基本的な条件であるとわかる。

新作能には、当然ながらその時代における意識や価値観などが反映されているが、戦時中の作品再演は、差別的な詞章や戦争賛美の内容が多く、上演の障碍になっていることは否めない。しかし、その作品分析を通して、当時の能楽界、能楽師、観客の心情や意図を明らかにすることは必要である。

今後あらたな創作が続く新作能の歴史を把握するため、「皇軍艦」とその原作「赤道神」を対象に、原作者佐古少尉の実像、「皇軍艦」演能までの経緯や演出などについて考察する。

I 「皇軍艦」の概要と諸問題

(1) あらすじ

米英討伐の命を受けた日本海軍の戦艦が赤道を通過する。航海の安全祈願のために艦長（主ツレ）は、赤道神（海神ポセイドン）を鎮めるための赤道祭を執行しよう命じる。赤道神（シテ）が現れて荒ぶるが、艦長をはじめとする乗組員達（複数のツレ）の武勇と大東亜の繁栄を讃えて道を開ける。大きな作り物の鍵が赤道神から艦長に渡される。一同は、晴れやかに南海へ進む。

(2) 先行研究

次の三つが挙げられる。

西野春雄「新作能の百年（1）——1904年～2004年——」（『能楽研究』第二九号、二〇〇五年五月三一日）では、新作能の歴史を扱う年表中に、「皇軍艦」の作者・成立年月日・あらすじが示されている。

米田文孝・秋山暁勲「伊号第29潜水艦とスバス・チャンドラ・ボース」（『関西大学博物館紀要』第八号、二〇〇二年三月三一日）では、伊号二九潜水艦の当時の艦内の生活様式やスバス・チャンドラ・ボースの移乗経緯などが書かれており、「2. 伊号潜水艦の艦内生活」（8）赤道祭、（9）艦内誌「不朽」の項目では、船員達が行った赤道祭や艦内誌「不朽」の詳細が述べられており、

「皇軍艦」は、艦内誌「不朽」（創刊号）に掲載された佐古少尉作の謡曲「赤道神」が基となっていることが示されている。

田中允『未刊謡曲集（続十四）』（前出）には、「皇軍艦」の詞章の全文が収められており、先に示したように解題には「敗戦後の現在では到底受容できない作品である。」との評価がされている。

また、平成二十七年一月五日付の「朝日新聞」（三河版）には、愛知県碧南市立大浜小学校（金子てる子校長）で、市内の民家から発見された、雑誌「不朽」の活字化作業をし、同年二月四日に、五年生の学級で謡曲「赤道神」の内容解読を平和学習として実施したとある。

（3）艦内誌「不朽」創刊号と原作「赤道神」

艦内誌「不朽」の現存数は極めて少ない。その理由は、本誌が潜水艦内で発行された同人誌的な要素を持っている点と、伊号二九潜水艦が昭和十九年七月二六日にアメリカの魚雷によって撃沈され、生存者一名を除き乗組員が全員死亡したためである。さらに、本誌は娯楽的な内容であるとはいえ、潜水艦の位置や艦内の細部が特定できないように極秘扱い^{注3}になっていたからである。前出の米田文孝・秋山暁勲「伊号第29潜水艦とスバス・チャンドラ・ボース」では、「不朽」第二号を確認できる通し番号が一二五部であることから、創刊号もほぼ同数と推定し、外部に配布されたのは一〇部程度で、第三号は発行されていない可能性が高いと指摘している。

「不朽」創刊号は、昭和十八年二月一日に、藤田軍医大尉が編集の中心となって発行された。表紙の題字は、司令の勝田治夫大佐の染筆によるもので、乗組員の戦意を高める論説、滑稽な読み物、漢詩、和歌、俳句、川柳、民謡など多様な分野で構成されている。発行が二月上旬であったことから、前年の一月三日にノルウェーの油槽船を撃沈させたこと、一月一九日に第一〇回赤道祭を執行したこと、赤道近くで年越しと元旦を迎えたことなど、当時の最新の出来事を題材にした内容が多い。佐古少尉も、この第一〇回の赤道祭を意識しながら、「赤道神」を投稿したと考えられる。また、「赤道神」は、艦長（木梨鷹一中佐）の年頭所感と大尉二名の論説に続いて、全一〇五頁ある中の一六頁から三二頁の冒頭の方に掲載されている。この構成から、編者の藤田軍医大尉は、この謡曲を創刊号の「中核」に据えたといつてよい。

（4）考察すべき点の整理

以上、新作能「皇軍艦」に関する主要事項を挙げてきた。これを踏まえて、以下では次のような点から考察を加え、作品の内実を明らかにしてみたい。

- ① 「赤道神」作詞から「皇軍艦」演能までの経緯
- ② 原作者佐古少尉の実像
- ③ 「皇軍艦」にワキが登場しない事由について
- ④ 「赤道神」と「皇軍艦」の演出について

II 「赤道神」作詞から「皇軍艦」演能までの経緯

すでに述べた通り、「皇軍艦」は、佐古少尉が艦内誌に投稿した謡曲「赤道神」を原作としている。昭和一八年五月一日、檣書店発行の謡本「皇軍艦」の前附には「大本営海軍報道部の委嘱により謡曲化し、皇軍艦と題して発表した当流新曲である。」と記され、六世観世鍔之丞（当時の観世宗家幼年のため後見人を務めていた）が能に仕立てたとされている。

(1) 伊号二九潜水艦と「皇軍艦」関連事項の年表^{注5)}

- 一九四二年（昭和一七年）
 - ・一二月一九日 伊号二九潜水艦において第一〇回赤道祭を開催。この時の写真が「不朽」創刊号に掲載されたと推定されている。
- 一九四三年（昭和一八年）
 - ・二月八日 ボースを乗せたドイツ軍艦がフランス大西洋岸のブレストを出航。
 - ・一日 艦内雑誌「不朽」創刊号にて謡曲「赤道神」発表。
 - ・三月二日 「不朽」題字を書いた司令官の勝田大佐、伊号二九潜水艦が所属していた第一四潜水隊司令を急遽、解任。横須賀鎮守府になる。
 - ・四月六日 伊号二九潜水艦、ボース乗船のためペナン港出。
- 一九四四年（昭和一九年）
 - ・五月六日 伊号二九潜水艦スマトラ島に到着。
 - ・一五日 檣書店より「皇軍艦」の謡本発行。
 - ・二五日 「観世」五月号で「皇軍艦」発表。「不朽」第二号に「二五日に海軍記念日に先立ち全国放送された」とラジオ放送の記載があるが、実際の放送は二八日。
 - ・二六日 「皇軍艦」が華族会館にて初上演される（シテ・一世梅若万三郎 ツレ・六世観世鍔之丞 他のツレは鍔之丞一門）。
 - ・二七日 「不朽」第二号、潜水艦整備中のシンガポールで刊行（この日は、海軍記念日）。
 - ・二八日 午後八時「皇軍艦」ラジオ放送される（昭和一八年五月二八日付「朝日新聞」（東京本社版）「ラジオ欄」に記載）。同年九月、音源がニツチクレコードよりレコード販売される。
 - ・六月一六日頃 ボース、東條首相と会談。
 - ・二三日 ボースと東條の会談が新聞に掲載される（保安上、一

九日 乗組員に、ボース乗船の特殊任務を公表。

日本では、「芸術報国大会」（東京九段軍人会館）にて、鍔之丞が「戦時下における能楽師の覚悟」を講演。「皇軍艦」を作曲中であることを発表。

一日 勝田大佐、軍令部と海軍省に出仕。

二七日 ドイツ軍艦から伊号二九潜水艦にボース、移動。

週間遅れの報道)。

●一九四四年(昭和一九年)

三月二五日 雑誌「観世」終刊。終刊号二〇頁「海軍学生の見た

能^{注6}」の箇所、海軍経理学校の剣道場にて学生のた

めに行われた「皇軍艦」「船弁慶」「笠之段」「寝音曲」

についての記事がある(実施日時の詳細は不明。二

月号に掲載されていないことから、二月中旬から下

旬頃と考えられる)。

(2) 日本での「不朽」創刊号

伊号二九潜水艦は、昭和一八年四月「スバス・チャンドラ・ポースを安全に日本に連れてくる」という、重大かつ厳戒な任務に臨んでペナン付近を航海中であった。娯樂的でありながら極秘扱いになっていた、この潜水艦の艦内誌の謡曲作品が、約三カ月の短期間でどのような経緯によって演能の実現に至ったのであろうか。

先に示した米田・秋山両氏の論には「どのような経緯で「赤道神」が外部へと提供されたのかは定かではないが、『不朽』第2号には「創刊号は畏くも山階宮様へ献納の榮に浴した」との記述があり、『不朽』が外部へ配布されていたことは事実であり、その過程で「赤道神」が能に仕立てられ、上演が実現したのであろう。」と指摘されている。

「山階宮様」とは、元司令官勝田大佐の海軍兵学校での同期生(大正七年一月卒。第四六期生)であった山階宮武彦王を指すと考え

られる。武彦王は皇室で初めて海軍航空隊に所属したが、関東大震災で懐妊中の佐紀子妃が薨去したことにより精神を病み、戦時中も極限られた人物とのみ交流していたとされている。「不朽」第二号の「山階宮様へ献納の榮に浴した」という記事は、読者の乗組員にとつては、単に皇族の高覧に預かったという榮譽のみではなく、武彦王と同期であり、司令を解かれ日本に帰国した勝田大佐のことをも意識させる文言であったと考えられる。

武彦王がどのような経緯で閲覧したか、他にどのような人物が、内地で「不朽」創刊号を閲覧したかは現在までのところ明らかではない。また、誰が「不朽」創刊号を持ち帰り、誰が謡曲「赤道神」を能に仕立て上演することを決定したのかも不明である。さらに、観世鍔之丞に依頼したのは「軍令部」か「海軍省」か、いずれにも依頼^{注7}の根拠を示す資料があるため決しがたい。現時点では、「ポース護衛」という極秘任務中にも関わらず、急遽司令を解かれ、昭和一八年三月下旬頃に帰国し、軍令部と海軍省双方に出仕した勝田大佐が関与している可能性を示したい。また、昭和一八年五月一日には「皇軍艦」の謡本が刊行されていること、勝田大佐を基準に、伊号二九潜水艦を含む第一四潜水隊からの帰国者の活動が三月下旬から四月上旬であったことから、観世鍔之丞が原作「赤道神」を読み、能に仕立てた準備期間は昭和一八年三月下旬から五月上旬の、長く考えても一カ月半程度と推測できる。

Ⅲ 原作者佐古少尉の実像

佐古少尉の人物像は不明な点が多い。その理由は、先に述べたように、「不朽」が艦内の娯楽雑誌でありながらも、取り扱いが厳重であり、外部には一部の関係者のみに配布されたことに起因する。当時の雑誌「観世」や檜書店発行の謡本「皇軍艦」前附等には、潜水艦内の同人雑誌に掲載されたことは記載されず、佐古少尉自身は、作詞の契機や上演に関する所感を述べている記事もない。またいずれの資料にも、「佐古少尉」と名字と階級のみが表記され、名前は記されていない。昭和一九年一月号の「観世」の広告において、ニツクレコード（日蓄工業株式会社）が「皇軍艦」のレコードを宣伝しているが、その際も「佐古海軍少尉原作・観世宗家作曲」（実際は宗家後見人の缺之丞）とのみ記されているのである。

一方、昭和一五年一二月号の「観世」には、大阪での奉祝能の開催にあたり、軍人の祝辞が掲載されている。そこには「中部軍司令官 陸軍中将 岩松義雄」と所属、階級、氏名が明記され、同誌の別頁では、「謡曲に表はれたる日本精神」と題し、陸軍少将藤竹信之の挨拶文が写真つきで掲載されている。

話題になった新作能の原作者が公に登場しないのは不自然であり、世論も関心がある中、軍人が名字と階級のみで紹介されるのは必ずしも一般的ではないといえる。また、「佐古少尉」が当時有名な人物であり、名字だけで誰もが把握できる軍人であった可能性も

低い。秦郁彦編『日本陸海軍総合辞典』（一九九二年一月一日）には、陸海軍主要学校卒業生一覧があり、その中で、「II海軍」の箇所に「佐古」という姓の人物が確認できるが、右少尉に該当する人物を見出すことができない。

このような点からすると、佐古少尉の実像は次のような可能性が考えられる。

① 執筆者がペンネームを用いた。

② 保安上の事由で「名前」を公表できなかった。

（1）執筆者がペンネームを用いた可能性

この場合、実際は階級が少尉より低い人物であったり、複数名の合作であったりしたために娯乐的にペンネームを用いたが、短期の準備期間中に、そのまま公式発表をされたしまったということになる。しかし「不朽」は、勝田大佐の題字、木梨中佐（艦長）の所感、編者の藤田軍医大尉の論説など、佐官、尉官の投稿もあるが、俳句や川柳などは「曹」や「兵」の位の者の作品も多く確認できる。また、「佐」「尉」「兵曹長」までは、おおむね上位の順に掲載されているが、それより下位の者の作品は、位順、アイウエオ順、イロハ順、テーマ別でもなく順不同に掲載されている。例えば、俳句の箇所では、岡山大尉一句、藤田軍医大尉二句、佐古少尉九句、生駒兵曹長一句、長久保兵曹長一句の掲載後は、位順は統一されていないという具合である。このように上位者のみに限定されるが、階級意

識を雑誌から確認することができる。そのため、佐古という人物は実際に、「少尉」の位であったことは動かしがたい。

そして、「少尉」の階級は、海軍兵学校を卒業した時点になる場合が多く、当時の海軍少尉の定限年齢が三八歳であったことから、年齢は二〇代中盤から三〇代後半の人物ではないかと推測できる。

また、佐古少尉は謡曲「赤道神」のみではなく、俳句九句、短歌一二首と、合作をする可能性の少ない作品分野にも多数投稿しているため、謡曲も単独で創作したと考えられる。

「不朽」創刊号において、ペンネームが用いられている作品は、少年時代の「K子」との回想をつづつた「夜話」という独自の読み物のみである。この作品は「穂川狂二作」と記されているが、二つ前に掲載されている随筆「戦線ノ兄ヨリ弟へ」を書いた細川清（上曹）と同一人物と考えられる。内容が、夜半に女性のことを思いついた内容であったため、ペンネームを用いて、「フィクション的」な工夫をした可能性がある。

以上から、尉官の者は基準を以って掲載されていること、佐古少尉は他分野の作品も投稿しており、合作の可能性は低いこと、「不朽」の投稿者は基本的にペンネームを用いないことから、佐古という人物が、少尉の位であり、単独で「赤道神」を作詞したと想定される。しかし、「不朽」は氏名で投稿されているものもあるが、大半は名字と階級のみで表記されており、佐古少尉の名前の方は確認できない状況である。

(2) 保安上の事由で「名前」を公表できなかった可能性

隳之丞が海軍関係者から「赤道神」を能に仕立てる依頼を受けて公演準備をしていた頃、伊号二九潜水艦は、ボース訪日の護衛という、最も緊張感のある任務中であり、その周辺の情報は厳重なものであったといえる。しかし、「忠霊」が観世一門の浅見真健の作であったのに対し、海軍関係者が、「皇軍艦」の軍人原作であることに意義を見出したことは、当時の宣伝広告などに就いても明らかである。一方で、隳之丞も、「観世」主筆の三宅襄も、「不朽」や佐古少尉に関する情報をどの程度持っていたのか不明であり、隳之丞が実物の「不朽」創刊号を閲覧したのか、「赤道神」のみの抜粋を参考にしたのかも特定できない。

詳細は後述するが、「不朽」に投稿された他作品が、「皇軍艦」において強い影響をもっていないことから、保安上の事由も併せて、隳之丞は佐古少尉の他の作品や「不朽」創刊号の実物は閲覧していない可能性が高いと考えられる。

(3) 佐古少尉の作品

「不朽」には、漢詩や自由詩、民謡など多様な作品が投稿されているが、佐古少尉の投稿は、謡曲と俳句、短歌の三種類である。

参考として俳句と短歌の例を左に挙げる。

・俳句 バナナ売る新附の民の洗足哉

スコールに青葉の基地のけむりけり

我射てばタンカーの燃えて夕日哉

・短歌
ペリスコープに映れる木梢は仇国の緑なりしかも瑞々しかりけり

みいくさの波路の涯に日を経りて生ずる垢は鱗なすかも

仇船を刺し違へんと誓して令じ征くなり吾がますらをの友
「赤道神」をみると、謡曲の基本的な進行構成に沿っていること、七五調であること、節はないが「謡う箇所」と「台詞の箇所」が区別されていることから、能楽に対する一定の知識があったことが判る。しかし、謡い方を示す「次第」「道行」「一声」などの専門用語の指示はなく、「明快二」とのみ添えられ、他の乗組員のためにわかりやすくした工夫か、佐古少尉自身が能の愛好者ではあったが、専門知識は持っていなかったと考えられる。

いずれの投稿作品も「バナナ」「タンカー」「ペリスコープ」などカタカナが多く用いられている。その特徴から、外来語を用いながら、七五調の表現形式を好んだと考えられる。

また、同じ七五調でも川柳は投稿しておらず、作品上には「四方の海」など、古典的用語も使用しているが、古典作品を典拠にしてゐるものは「赤道神」の一例しか確認できない（大伴家持の長歌引用であり、詳細は後述する）。そして、古典謡曲で有名な詞章や見せ場（例えば「船弁慶」で、後シテの平知盛の亡霊と船上で対峙する義経（子方）の台詞「その時義経少しも騒がず」のような箇所）を想起させる引用も「赤道神」にはない。

これらの点から、世俗的な表現はせず、同時に古典趣味的な表現も用いず、潜水艦乗組員として航行する自身の体験を作品へ反映させた創作が多いといえる。

「不朽」創刊号における、他の少尉達の作品とも比較すると、「赤道神」の次頁に掲載されている、杉全少尉の「油虫訓」というゴキブリの視点で書かれた戯作的な作品、小野少尉の七言絶句の漢詩六編、坂本少尉の口語定型詩「俺等の任務」など、同じ階級でも個々の創作傾向がうかがえる。

図版①「観世」昭和一八年九月号「皇軍艦」レコード広告



IV 「皇軍艦」にワキが登場しない事由について

「皇軍艦」は、観世宗家の後見人である缺之丞が能に仕立てたにもかかわらず「能らしくない」点が指摘できる。それは「ワキ」のいない設定という点である。

主役を勤めるシテとそれを支えるワキの役割は、明確に分担され、ワキ方は、シテ方（ツレや子方を含む）の主役性を高める能独特の相手役である。この完全に役割分担する形式は、能が大成した南北朝時代から変わらず、シテ方の役者が「今回はワキを演じる」などというようなことはない。

つまり、折衷演劇や特殊な演出を試みない限り、基本的な「能」として上演する場合には、シテ方、ワキ方、囃子方は必要条件なのである。しかし、ワキが登場しない特例も挙げられる。それが、古典作品「歌占」である。「歌占は」、配役設定の違いを、上掛系注8（観世流、宝生流）、下掛系（金春流、金剛流、喜多流）で分類することができ。 「歌占」は下掛系にワキが登場するのに対して、上掛系ではツレがワキの代理的役割をする。これは上掛系で上演が中断された経緯があり、復曲後に臨時でシテ方のツレが演じたことが通例となったと考えられている。この「歌占」の例から、ワキを設定せずシテ方のツレがその役を演じることは、能の基本的な演出において、消極的な理由がない限り、そのような形態にはならないということがわかる。

「皇軍艦」は、新作能であるが、その作風は龍神や鬼が登場する五番目物（例えば「竜虎」や「雷電」など）の古典的な形式をとっている。そのため、ワキ（通常なら）や地謡によって、場面情景の説明がされ、その土地の由縁を語り、シテが登場し華やかでテンポの速い舞を舞い、終わる、という形式が基本である。

演劇的意図があつて通常ワキが演じる役をツレに設定したのなら、缺之丞の所感や、観客からその演出に対する評価があつてもよいが、この「ワキなし」という演出が、能の形式として非常に特殊な配役であるにもかかわらず、一切の言及はされていない。

一方「シテ」の「赤道神」、「主ツレ」の「艦長」についての言及はある。昭和一九年一月号の「観世」一八頁では、梅若万三郎の「謡ひ方講座―皇軍艦―」では「赤道神がシテになつてゐますが、艦長もこれに劣らない大役ですから、まづ両シテ注9と見て位を取ります。」とあり、「赤道神」と「艦長」はどちらも重要な役柄であることを強調したものと考えられる。一方で、当時の国民を鼓舞するために作られた新作能「忠霊」「義経」「緋櫻」などには、ワキが登場する。「忠霊」に続く観世一門の大仕事である「皇軍艦」上演で、なぜこのような特殊な演出にしたのか。

当時の状況として消極的な理由と積極的な理由との二つの側面が作用したと考えられる。消極的な理由とは能楽師側の時間的問題であり、積極的な理由とは海軍との関係である。

一つ目の能楽師側の時間的問題については、稽古時間と人員不足

の問題である。先に述べたように鍔之丞の能に仕立てる準備期間は一カ月半程度であったと考えられる。仮に、それよりも事前に何らかの経緯で鍔之丞が極秘に準備をしていたとしても、他の役職の家に台本を渡すことはむずかしい。五番目物の形態に即した作品であるから、節付けや舞などは従来の古典作品と同じ演出にできるため、囃子方は直前の依頼でも問題も少ない。しかし、ワキ方が口語の詞章を覚え、且つ他の演能活動もしながらの準備は、不可能ではないが余裕はない。

本来ならば、ワキ方に依頼をし、打ち合わせをしながら取り組むべきものであるが、五月二七日の海軍記念日の前日に合わせて上演をしなくてはいけないため、鍔之丞は同門のシテ方内で効率よく稽古ができるように、ワキの配役を主ツレの設定にしたと考えられる。詞章の多い主ツレの「艦長」を、作曲した鍔之丞自身が演じ、華やかなシテの赤道神を、体格の大きい鍔之丞の義兄である梅若万三郎が勤め、鍔之丞の養子（実弟）の観世織夫（後の七世鍔之丞）が地頭を勤めたことも、その事情が反映されているといえる。なお、「皇軍艦」は宗家である元正は出演していない。当時は慰安公演などで、子方をしつつ、直面で成人役者に加わりツレも演じていた。しかし、シテと主ツレは知名度のある成人役者が演じる方が自然であり、同時に他のツレでは「宗家」にはふさわしくないといい、このことで出演しなかったのであろうと考えられる。

二つ目は、海軍との問題である。本作品は「赤道を巡る潜水艦の

兵士の武勇物語」を明確な主題にしていた。そのため、檜書店出版の謡本「皇軍艦」の前書きには次のようにある。「本曲の狙ひは、大東亜戦争に対する日本の根本理念を明示して、敵国米英の非道を糾弾し、大東亜十億の民族の為に躍起した皇国の正義を昂揚するにある。赤道神を引用したのは脚色上の方便であって、作の中心を貫くものは、厳然たる皇道精神であることを忘れてはならぬ」と記されている。

能は、面をつけ演じるのはシテ方だけの役割であり、また、神がツレになり、人間をシテにするのも能の演出上限界がある。したがって、赤道神をシテとする設定は変更できない。しかし、この作品の主題である皇道精神と武勇を示すために、作品中に活躍をする艦長を、ワキ方ではなくシテ方が「主ツレ」として演じることによつて、あくまで「シテを高めるだけではない設定」すなわち「両シテの位」を強調したのだと考えられる。

本作の航海長、砲術長、甲板士官なども、艦長の付属的な役割をしているため「ワキツレ」というワキ方の設定の方が能としては自然であるが、ワキがないためツレに設定されている。さらに、この「皇軍艦」が、伊号二九潜水艦をモデルにしていることは、海軍関係者の一部の者は把握していることであり、それに伴って、実際の艦長や航海長などが想起されることになる。その実在の軍人たちの配慮からも、短期間でより完成度の高い作品に仕上げられるよう、鍔之丞一門で演じたと考えられる。

原作「赤道神」から「皇軍艦」という題名変更をして、赤道神の威力より潜水艦の軍人の武勇を主眼とし、また、他の新作能ではシテが武人である通例にしたがって、このようなワキのいない特殊な演出になったと考えられる。

V 「赤道神」と「皇軍艦」の演出について

(1) 題名決定と配役について

新作能の題名については、銕之丞の「芸術報国大会」での講演の言葉（注6参照）から、海軍関係者が一九四三年の四月上旬頃までに「皇軍艦」と題したのであると推測できる。

「皇軍」という語は、日本出版文化協会に推薦された田中克己の詩集『神軍』（天理時報社出版 昭和一七年五月二〇日発行）中の詩「神軍」（文藝世紀）昭和一七年一月号初出）に確認できる。「軍艦」は『教科書統合少年唱歌』全八冊中の二冊目（明治三六年六月四日発行）加藤義清作曲の「軍艦」に確認できる。雑誌「観世」では、昭和一七年五月号の銕之丞の言葉、六月号の上演に関する記事では、「皇軍艦」に振り仮名がついており、「皇軍」「軍艦」を併せ、武勇を讃える潜水艦での物語は、軸にすべきは赤道神ではなく、軍人と潜水艦であろうという意図から「皇軍艦」という題が生まれたと考えられる。「赤道神」の詞章の中には、皇軍艦という語はなく、佐古少尉の短歌で「みいくさ」と平仮名表記のものもあるが、「ふね」

に関連する内容ではない。

配役に関してまとめると、次のようになる。

	「赤道神」	「皇軍艦」
シテ	赤道神	赤道神
ワキ	司令・艦長	なし（主ツレとして艦長）
ツレ	諸神・航海長・砲術長・甲板士官	諸神・航海長・砲術長 甲板士官
アイ	祭祀員	祭祀員

まず、シテは「赤道神」「皇軍艦」どちらも赤道神に設定されている。「皇軍艦」には、先述の通りワキはいないが、やはり鬼神と人間の役があれば、鬼神をシテに据え、人間の役はワキかツレが勤めるのが能の基本である（古典作品「谷行」のように、ワキの阿闍梨が作品の中心的な役割をするにしても、シテは鬼神である）。そのため「皇軍艦」では、赤道神と艦長は「両シテの位」と、意識的に補足されている。ワキに関しては、原作には登場した司令（モデルは勝田治夫大佐）のいないことが注目すべき点である。「赤道神」では、司令の詞章は後半に至るまであらわれず、物語の進行は艦長（モデルは木梨鷹一中佐）がつとめている。

(2) 演能形式と詞章について

「皇軍艦」では、ワキを設定していないため、司令も役に加えるなら、階級序列を考慮すると配役順序は、主ツレ司令・ツレ艦長とその他となるべきものである。原作の司令の言葉が少なく艦長のみで演出が可能であること、配役に階級意識の考慮が必要であること、役者の人員や稽古期間などを総合的に鑑みて、缺之丞は司令の役を除外したのであろう。なお、原作では艦長を「ワキツレ」と称さず「ワキ」としている。この点は、佐古少尉がワキツレという言葉省略したのか、「両ワキ」という独自の作意であったのかは不明である。ツレに関しては、双方の謡本で諸神を設定している。「一角仙人」のように供の諸神を引き連れて舞を舞うのは、一般的であり華やかである。しかし、「皇軍艦」の演能記録には「諸神役」が記載されていない。人員や、仮設舞台での広さの課題に加え、主題は鬼神の華やかさではなく「武勇」であるという方向性に統一するために諸神は排除したと考えられる。赤道神の「いかに下界の龍神確かに聞け。電光雷電の暴風雨を起し。彼等が武勇を、試みよ」という台詞があるが、暴風雨の様子は囃子のみで表現が可能であり、諸神の台詞はないため不都合はない。

同様に、アイも、当時の演能記録にアイの狂言方の名前が無いこと(アイの配役名を省略することもある)、一場物^{注10}なのでアイが必要ないこと、シテ方缺之丞一門で準備をしていたことなどから、実際の演能では登場しなかった可能性が高い。

「赤道神」	「皇軍艦」
<p>①艦長が南海の情景を謡い、赤道を通過することを述べる。</p> <p>②艦長が、甲板士官を呼び、赤道祭の準備を命じ、さらに甲板士官が祭祀員に準備を命じる。</p> <p>③シテの赤道神が諸神(台詞有)を連れて登場する。諸神に、潜水艦の武勇を試すため、嵐を起せと話す。</p> <p>④艦長が異様な暴風に驚くと、航海長が「妖魔の仕業である」と言い、砲術長は大砲で撃退しようといさむ。</p> <p>⑤司令が「赤道は神域であるため妖魔の仕業ではない」とその場を収め、赤道祭が執行される。</p>	<p>①艦長が南海の情景を謡い、赤道を通過することを述べる。</p> <p>②艦長が、甲板士官を呼び、赤道祭の準備を命じ、さらに甲板士官が祭祀員に準備を命じる。</p> <p>③シテの赤道神が諸神(台詞無)を引き連れて登場する。諸神に、潜水艦の武勇を試すため、嵐を起せと話す。(舞働)</p> <p>④砲術長が異様な暴風に驚くと、航海長が「妖魔の仕業である」と言い、砲術長は大砲で撃退しようといさむ。</p> <p>⑤艦長が「赤道は神域であるため妖魔の仕業ではない」とその場を収め、赤道祭が執行される。</p>

<p>「赤道神」</p> <p>⑥ワキ（司令か艦長かは不明）と地謡によって、米英の悪行とそれを排斥する日本の徳が謡われる。艦長の指揮の基、嵐に立ち向かっていく。</p>	<p>「皇軍艦」</p> <p>⑥地謡によって、艦長の指揮の基、嵐に立ち向かっていく潜水艦の様子が謡われる。</p>
<p>⑦赤道神は日本の武勇を讃えて、赤道通過のための鍵を艦長に渡す。</p> <p>⑧米英討伐を誓う地謡で終る。</p>	<p>⑦赤道神は日本の武勇を讃えて、赤道通過のための鍵を艦長に渡す。</p> <p>⑧米英討伐を誓う地謡で終る。</p>

詞章は「赤道神」は「不朽」創刊号、「皇軍艦」は古典文庫版『未刊謡曲集』（続十四）の本文に拠っている。

表で示したように、物語の進行や内容に大きな差異はないが、「皇軍艦」③（舞働）の箇所のように、舞や囃子の詳細な指示が「赤道神」にはない。「赤道神」は「謡曲」であり能仕立てではないので、指示がないことは不自然ではない。佐古少尉が「能」として実際に演能されることを意識したのではなく、詞章を鑑賞する「謡曲」として作詞したことがわかる。また、実際の詞章の文字数を比較してみると、「赤道神」が約二五〇〇文字、「皇軍艦」が一八五〇文字であ

り、原稿用紙に換算すると一枚半程度の縮小がされている。「赤道神」は節が付けられていないため、文字数のみでは「皇軍艦」がどれくらいかの演能時間を短縮したかは計算ができないが、注1の資料中に「みなで五十分といふ時間は、ほんとにこの忙しい時局に相應はしい。」と評されていることから、缺之丞が意識して短時間の作品に仕上げたと考えられる。

また、「皇軍艦」には、佐古少尉が「赤道神」で用いた「ABC D包団陣」「テレグラフ」「シリンダー」などのカタカナやアルファベットの表記は一切なく、当然「伊号二九潜水艦」など情報が特定される固有名詞もない。また、「支那事変」や「九国条約」など、米英国との政治的な説明や批判（「赤道神」傍線⑥）は割愛されている。この箇所を割愛することによって、先に述べたように缺之丞は時間を短縮したと考えられる。

一方で、南海の情景を黒白緑赤の色を用いて謡う箇所は、原作に近い詞章で表されている。説明的な詞章を省略することによって、美しい南海の風景から、赤道通過で嵐が起こり、それに立ち向かい晴れやかに突き進む構成は、「序破急」という能の演出に沿っているもので、より主題の「武勇」を表現するための工夫であったと考えられる。

最後の詞章を比較すると次のようになる。

・「赤道神」 正義の剣遂に抜きて 水漬く屍と勇み勇めば神々は至誠に感じ 奇瑞を表はし 世界の涯に我等の行手を護らせ給ふ

実に取りがたき御陵威哉（三度）

・「皇軍艦」海行かば。水漬く屍山行かば。草むすかばね大君の。辺にこそしなめ武士の。引きは返さじ梓弓、弥猛心ぞ頼もしき、弥猛心ぞ頼もしき。

いずれにも「水漬く屍」とあるが、この語句は『万葉集』巻一八所収の伴家持の「賀陸奥国出金詔書」の長歌を典拠としている。しかしそれ以上に、当時、家持の長歌を基に信時潔が昭和一二年に作曲した「海行かば」の軍歌^{注11}が大きな基盤となっている。この軍歌の歌詞は「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なめかへり見はせじ」とあり、「赤道神」ではワキの冒頭の箇所^{注11}で語われている。

佐古少尉が「赤道神」で二度この歌の語句を引用したこと、鍔之丞が、最後の部分で軍歌のほぼ全文を引用したことは、当時の時世をよく反映している。

佐古少尉が南海で体験した赤道祭を基に作詞した「赤道神」は、潜水艦の専門用語が含まれ、乗組員の仲間意識を高めるものであった。それを鍔之丞が、さらに「武勇」に焦点をあて、万人が時勢に沿った共感のできる詞章に仕立て直したということになるのである。

注

注1 昭和一八年六月号「観世」一九頁「皇軍艦の上演に接して」にて「五月二十六日華族会館の恩賜能舞台で三回に亘つて演能され、世間に大きな反響を起こした」とある。同日に何度も同じ作品を上演することは、能では稀である。

注2 『日本戯曲大事典』（白水社、二〇一六年九月三〇日発行）七三三頁「新作能・狂言」の箇所参照。

注3 「不朽」創刊号、編集者の藤田軍医の選者の辞にて「西岡兵曹の（一年をかへり見て）」の如き努力作もあつたが、あまり長いし機密保持上から本誌にのせない事にした」とあり、編集段階から情報管理を意識していたことがわかる。

注4 観世元正。太平洋戦争中も慰安演能をし、子方と成人担当の役の両方を務めている。昭和一六年一月一日の新作能「忠霊」では鍔之丞のシテにツレとして出演。この時期の演能がニュース撮影された。

注5 年表は、米田文孝・秋山暁勲「伊号第29潜水艦とスペース・チャンドラ・ボース」（関西大学博物館紀要）第八号、二〇〇二年三月三一日）を参考にしている。

注6 「観世」編集者三宅襄は「筆者も当日の皇軍艦の地は、前半においてかかり方が足りないと感じた一人である。忠勇無双の帝国海軍の出勤らしい元気がなかった凜然たる風が充分に表現されていなかった。皇軍艦の曲趣そのものが、皇軍將兵

のはちぎれるような勇気を籠めたものであることを忘れてはなるまい。」と生徒の所感を受けて自身の感想を述べている。この記事は「本誌の終刊に際して」の前頁にあるため、時節の状況がよくわかる内容である。

注7 銕之丞は一九四三年四月九日に「芸術報国大会」の講演で、「又最近海軍省から御命令で皇軍艦と題する原稿を御下付けられ、新しい能を作るやうとの御依頼を受けまして只今慎重に作曲いたして居り、頓て出来上りました上は近く発表致す運びになつて居ります。」と述べている。檜書店発行の謡本、前附では「大本営海軍報道部」となっている。

注8 「上掛・下掛」とは、シテ方流儀を分類する語で江戸初期には一般化していたもの。

注9 能・狂言ともにシテは一人と決まっているが、演目によっては、共演者の役割が特別に重く、シテに匹敵する格を必要とした時、シテが二人いるかのような扱いをすること。「二人静」や「小袖曾我」に例がある。

注10 能の曲目分類。「単式能」ともいう。前シテと後シテの区別がなく、中入りがない。そのため、着替え時間の必要がないためアイは省略できる。アイが登場しない作品は、現行曲で四〇曲程度ある。

注11 昭和一二年に、日本放送の囑託を受けた信時潔が作曲した。当時、日本政府が制定した「国民精神強調週間」のテーマ曲

であり、出征兵士を送る曲とし愛好された。

〔付記〕

本紀要の掲載にあたり、愛知県碧南市立大浜小学校、金子てる子校長に「不朽」に関する資料提供をして頂いた。ここに深く感謝の意を表す。

図版② 「観世」昭和一八年六月号 「皇軍艦」シテの赤道神

